

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

黒田壽郎 編

イラク戦争への百年

書肆心水

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

イラク戦争への百年

目次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

序 黒田壽郎 11

第一部 世界史的構造

アメリカの武力行使と国際法——イラク復興の眞の条件とは何か 27
眞田芳憲

イラクの再建と平和に向けて	28
9・11と仕掛けられたイラク戦争	32
9・11とイスラーム	35
アメリカの対イラク武力行使原因の正当性	41
アメリカの武力行使と国際法	44
アメリカの武力行使とジハード	51
今、イラクの復興人道支援に問われているもの	59

現代中東の国際政治——根源にある「イスラエル問題」 67 陶 常道

現代中東問題を考えるための前提	68
中東の国際政治を複雑にする要因——イスラエル・石油・情報機関	74
第二次大戦の戦前・戦中の遺産	82
第一次大戦後の国際政治	87
9・11事件とその後	105

総括と今後の展望 114
欧米の課題と日本の立場 132

第二部 中東諸国の歴史と現在

イランとアフガニスタンのイスラーム政権 141

—グレート・ゲームとイスラーム国家

櫻井秀子

いまなお生きるグレート・ゲーム	142
イスラーム国家の潜在的脅威	146
グレート・ゲームとイラン	156
グレート・ゲームとアフガニスタン	169
グローバルな公正を求めて	185

エジプト革新運動の高揚と挫折—アラブ世界を覆う無力感 189

北村文夫

中東地域を包む陰鬱な閉塞感	190
エジプト革命が放出した変革エネルギー	195
ナセル体制が内包させた脆弱性	201
サーダートの決断——対米接近とナセル遺産の放棄	207
ムバラク政権を翻弄するグローバル化潮流	214

ブッシュ戦略——軍事力による中東再編 220
歴史の重みと現代中東 226

パレスティナ問題の歴史と現在 235

黒田美代子

何がテロリズムとされるのか 237
イスラエル占領下の知られる現実 249
インティファーダ以後の展開 260
パレスティナ解放闘争をテロとする根拠は哪儿にあるのか 270

グローバリゼーションの中の中東諸国 279

——トルコ、サウディ・アラビア、シリア、ヨルダン、レバノン

黒田美代子

トルコ	281
サウディ・アラビア	287
ヨルダン	293
シリア	298
レバノン	303
中東諸国結束の衰えと民衆の不信の高まり	308

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

イラク戦争への百年

中東民主化の条件とは何か

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

序

黒田壽郎

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

9・11の同時多発テロ以降、世界の注目は専らイスラーム、ないしはイスラーム世界に注がれてい
る。それまでにも世界各地でさまざまなテロ活動が行なわれてきたが、このテロが実行された場所、
損害の規模の大きさが、大国アメリカに新たな決断を促したことは否めない。ニューヨークの金融活
動の中心である貿易センターで三千人に近い人命を失い、ワシントンの軍事的中枢。ペンタゴンを不意
打ちにされるといった事態は、歴史は短いがこの国始まって以来の大事件であり、これに対してなん
らかの強硬な施策を打ち出す必要があつたことは想像に難くない。そして最初に敵視されたのは、こ
のテロの下手人と目された過激な組織アル・カーディアであり、その背後にあつて彼らを匿うアフガニ
スタンのターリバーン政権であつた。ここに激しい空爆を加えて短時日のうちに政権の崩壊に成功し
たアメリカが、次に標的としたのはイラクのサッダーム・フセイン政権であつた。アメリカ主導の連
合軍はイラクに侵攻し、圧倒的な軍事力ゆえにさしたる抵抗も受けぬままフセイン政権を打倒し、そ
の後暫定政権を樹立することに成功したことは周知の事実である。

9・11の事件からイラク戦争とその後の戦後処理に至るまで、振り出しから帰結まで、まさに事態
は急転直下、予想を超えて大きく様変わりしている。ニューヨーク、ワシントンを振り出しにして遙
か遠くのバグダードに舞台を移す、このような大立ち回りのドラマを貫く筋書きは何なのか。予想を
大きく上回る事態の変化は、ただ人々の判断を惑わせ、眩暈をすらも催させる程のものである。しか
し時が経つにつれて明らかになつてくるのは、事態のさまざまな非対称性であり、それが必然的にも

序

たらす混乱である。

そもそもテロ行為は、権力の非対称的な枠組みの中で生起する。圧倒的な強者に対し言挙げすることが不可能な圧倒的弱者は、不満の掛け口を求める、自らの意思を何らかのかたちで公表するために、強者の隙を狙つて不意打ちの攻撃を仕掛ける。対等な交渉が不可能な弱者は、その際自分を匿名の状態に留めおくのが常である。彼らに可能なことは一時的、短期的な意思表示であり、その行為の結果は本来長期にわたつて効力を持つものではない。他方強者の側にとつては、この外的な、公の舞台では意思を公言しえない、匿名の者たちの捨て身の行為に対するは、警察的な組織を用いて自己防衛、予防する以外に手立てはない。実体が明らかでない匿名の人間、集団に対して、相手を特定して兵を差し向けるという軍隊の演ずる役割が存在する余地はないのである。しかし9・11以降変化したのは、テロ抑止という口実の下での、匿名の、実体のない集団の実体化である。そしてこの変化は、疑わしきは罰せずというこれまでの裁きの原則を改定し、疑わしきものすべての抑圧を正当化することによつて、さまざまなる変化をもたらした。

猜疑心というものは、正確な根拠を持たぬまま限りなく自己増殖することを本性としている。国境を越えるテロ活動が活発化することにより、それに対する国際的な防衛措置を講ずる必要があることには否定の余地がない。ただしその措置が、ある種の損害を特定の他国に及ぼしてはならないことも当然である。しかし今回のアメリカ主導の連合軍によるイラク攻撃は、留まるところを知らない猜疑

心が、守られるべきルールを逸脱した不幸な実例の一つとみなされるであろう。ことの発端として一部のテロリストは、正体を隠してアメリカに対し破壊活動を行なつた。その効果は恐らく彼らの期待以上に大きかつたが、それに対する反発も予想を上回る性質のものであった。テロ行為の被害者は、受けた被害を口実に自らの過剰な対応を正当化しているが、この際問われているのは匿名の集団が行なつた行為に対する報復が、れつきとした主権を持つ国家に対する軍事的攻撃へとエスカレートされていることの、正当性である。9・11のテロ行為とフセイン政権とは何の関わりもないが、この政権の抑圧的な強権ぶりが誘因となり、大量破壊兵器保有ならびにアル・カーディアとの関わりという嫌疑の下に、軍事的な攻撃の対象となつてゐるのである。その後次第にこれらの疑いの種子は、事實上存在しなかつたことが明らかにされているが、問題はこのような大義のない戦争が実際に戦われ、そのような不当な行為の結果が白日の下に大手を振つて罷り通つてゐることにある。

戦いは常に大義を必要とする。テロの抑止という口実を前面に掲げ、戦争に踏み切つたアメリカは、足元の危うい大義の他に、別種の口実を必要とした。それがイラクの民主化という目標である。独裁的で非民主的なフセイン政権を倒し、その地に民主主義を確立する。耳触りの良いこのスローガンに、国際社会の少なからざる人々が賛意を示しているが、ここには一つの大きな落とし穴が存在することに留意しなくてはなるまい。民主主義とは一つの体制であり、それがそれ自体として望ましいものであることについては、多くの人々にとつて異論はあるまい。しかしそれが備えていた美点は、すべて

序

の人間が他から〈強制〉されることなく、自らの意思によつて自分の命運を切り拓くという、大きな可能性を秘めている点にあるであろう。個人ないしは国家の主権、もしくは自主性こそが、民主主義のアルファでありオメガでもある。このようにこの制度の本性について配慮した場合、この制度そのものと同様に、それが実現されるさいの〈過程〉が重要であることが理解されるであろう。民主主義が云々される場合、先ず考慮されねばならないのはそれを受け入れる側の主権、主体性の有り様である。イラク情勢が語られるに当たつて、これまでほとんど蔑ろにされてきたのがこの国の民衆の主権、主体性の問題である。他国で起こつた大規模なテロ事件は、彼らと何の関連もなく、この点に関して負うべき責任は何もない。しかし被害者の側では、テロ防止対策という彼らとは完全に無縁な主題が際限なく膨張して、遂には仮想敵性国家に対する先制攻撃までをも正当化し、その結果無辜の彼らが大きな被害を受けることになつてゐるのである。これは匿名の集団によるテロ行為と、他国の主権の無視を等価に置くことに他ならないが、この種の論理のすり替え、主題の拡張を無原則に受け入れることが可能なのは、事態とは無縁な気楽な第三者だけである。自国の主権が無視され、その結果自らの同胞が数多く殺傷されるのを目の当たりにした当事者の、期待される第一の反応は如何なるものであろうか。それが何を置いても先ず、このような外部からの侵略者に対する敵愾心、それに基づく抵抗であることには疑問の余地はあるまい。民主主義体制確立のためというスローガンの下に、自國に膨大な量の弾薬が投下され、これに抗う抵抗運動が発生する度に、多くの無辜の民間人が巻き添えに

遭うという状況を前にして、民衆にただ手を拱いて黙視するよう期待すること自体が、きわめて不条理なのである。

サンダーム・フセインの強権政治が、多くの民衆の恨みを買つていたことには疑いがない。しかし彼が非民主的であつたことと、それ故に他国が勝手にイラクに侵攻し、その政権を打倒することは、論理的にも、民衆の感情にとつても次元の異なつた問題である。テロ行為に対処するに当たつて他国の主権の侵害を敢えてする非対称的な措置は、問題とは無縁な外部の者にとつて正当化されることがありえても、自らの主権を侵害された当事者たちの敵愾心を刺激しない訳がないのである。彼らの敵愾心がこのように主権の侵害に根を持つものであることは、フセイン逮捕後も情勢に少しの変化も認められない事実が挙げられるであろう。それは特定の指導者に対する忠誠といったものに根ざすものではなく、あくまでも守られるべき原則に対する侵害に由来するものなのである。アメリカ主導の連合国側は、現在進行中のテロ活動は旧フセイン支持派と、サドル師を支持する急進的なシーア派の一部の手によるもの、という簡単な割り切り方をしている。しかし民衆の主権というものを検討の基礎に据えるならば、この種の見解が如何に根拠を欠くものであるかは明白であろう。現在も依然として続くイラク国内の治安の不安定さは、支配者側の予測とはまつたく異なる結果を示しているのである。

最近パウエル長官よつて公表され、決定的に明らかにされたイラクにおける大量破壊兵器の不在は、今回の戦いが確たる理由もなく、單なる猜疑心に基づいて一方の側が、イラクという主権国家に対し

序

て先制攻撃を敢えてし、れっきとした内政干渉を行なつたことの証となるものである。アナン国連事務総長の言を待つまでもなく、イラク攻撃は違法であった訳であるが、イラクの民衆の敵愾心は、彼らがこの事態を正確に捉えていたことを証明している。テロ活動の抑制、ないしは民主主義の確立が先か、民衆の主権の擁護が先かという問題は、イラク情勢そのもの、その今後の展開を占う上できわめて重要である。それはこれまでテロ活動とみなされてきた反体制側の行動を、正当な抵抗運動と位置付けることになり、それによつてアメリカ主導の連合軍、さらに専らその力に支えられている暫定政権の正当性を危機に陥れるからである。大義を欠いたまま開始された戦いには、簡便な解決の道はない。最も単純な対処法は、武力による不満分子、反対勢力の抑圧であるが、これは一時凌ぎの方便に過ぎず、新たなテロリストを生み出す培養源を一層拡大するだけであろう。

現在のところようやく形ばかり確立された暫定政権は、大量に駐留し続ける連合軍の武力を頼りに、当面イラクの政治情勢を支配し、民衆の不満を押さえ込むことができるかも知れない。しかしこれらの軍隊が退いた後に、鬱積した不満を抱える国内情勢は、アメリカの思惑通りに維持されうるであろうか。紛糾するイラク情勢を判断する上で焦点となるのが、遅ればせながら戦争の大義としてアメリカが持ち出してきた、〈民主化〉をめぐる問題である。ただし既に示唆したように多くの途上国、とりわけイスラーム世界においては、これまで勝ち組みの欧米世界には存在しない、別種の大きな問題がある。この問題について考察するに当たつては、この地域が現代において経験してきた歴史的状況に

ついて、配慮することが不可欠なのである。

本書の、とりわけ第Ⅱ部の主題は、イラクに限らずこの地域一帯が、およそこの百年の間に一貫して体験してきたものが、何であつたかを示すところにある。それによつて明らかなことは、広大なこの地域の人々がほぼ例外なく、一つの〈共通体験〉を持つてゐるという事実であろう。それは彼らの心性に根付く普遍的な精神的因素といった抽象的なものに由来するものではなく、彼らの日々の生活に刻み込まれた、具体的な歴史的体験によって形成されたものなのである。この共通体験の細部を構成するものは、種々さまざまである。広大なイスラーム世界には多くの国々があり、それらはそれぞれ固有の歴史を持つてゐる。しかしそのような多様な歴史的体験にも拘わらず、そこに等しく、一貫して認められるものがあるが、それは端的にいって民衆にとつての主権、主体性の欠如の体験なのである。十九世紀後半より二十世紀にかけて、次第に衰退の度を強めたこの世界、とりわけ東アラブ以東の地域は、西欧列強とロシア帝国という大国間で争われたグレート・ゲームに捲き込まれ、強国の意思に翻弄される。その後の第一次大戦におけるトルコの敗北により、この地域一帯は植民地化の憂き目に遭うが、そのような隸属的な状態を耐え忍んだ後、第二次大戦を境に独立の嵐が吹きすさぶ。この時期にエジプトのナセルを旗頭にして、自立と変革の機運が高まるが、それも度重なるイスラエルとの戦いを契機にして、挫折を余儀なくされる。それからこの世界は下り坂を辿り、現在の悲惨なパレスティナ情勢に至るまで、二十世紀全般にわたつてこの地域の民衆が体験してきたのは、自分た

序

ちの政治的命運を自ら選び取り、再生の糸口を見出すための基本的な条件である、主権、自主性の「欠如」に他ならない。

この地域の百年の歴史は、時代、地域の相違によつて、それぞれ若干の相違点を内包しているにしても、一様な厳しい現実を示している。それは一貫して強大な外部からのさまざまな圧力、干渉の実体と、それに対抗して自らの主権、自主性を守り抜くことの困難という主題を奏でているのである。外国の干渉による主権の不在、自主性の欠如という共通体験は、単にイラクの民衆の間だけのものではなく、広くイスラーム世界の民衆すべてが共有するものである。彼らはこの共通の体験ゆえに、日々生起する諸事件を共通の角度から観察し、ほぼ等質の認識、判断を共有する。負の遺産についての共通の歴史的認識を基礎に、彼らはそれを一掃し、除去するために互いに強い連帶感情を共有するが、その基本となるのは先ずは主権、自主性の回復であり、それに基礎を置く公正さ、公益の尊重である。民主主義の提唱者である西欧によつて、植民地主義支配の憂き目を体験してきた彼らにとって、民主制の確立といったスローガンは、その条件であるこれらのものが先ず確保、維持されない限り、絵に描いた餅にしか過ぎないのである。

既に指摘したようにイスラーム世界の人々にとって、欧米起源の民主主義は額面通りのものではなく、二つの顔を持つている。それは理念的には、確かにこの地域の知識人をも惹き付ける多くの要素をもつてゐるが、同時にそれは植民地主義の時代には、強権的支配で具体的に彼らを苦しめた征服者

の思想であつたし、この思想の持ち主たちは冷戦中においても、彼らに対する敵対的態度を変えてはいない。独立後間もないこの世界の国々が、十年に一度の頻度で起きるイスラエルとの戦争で財政的に大いに疲弊し、そのために発展に遅れをとっているのは紛れもない事実であるが、その間一貫してこの好戦的な新造国家を援助し、庇護し続けてきたのはアメリカであつた。ところでその当時この世界は、大別して稳健派と過激派の二つに分類されていたが、前者はイスラエル問題を基軸にして、アメリカの政策に協調的、妥協的な国家を指し、それに強い抵抗を示す国々は後者に属するとされたきた。そして稳健派といわれる親米派の国々は、その多くが民主主義とは程遠い王制または独裁的政權で、いわゆる過激派といわれる国々の自主、独立を求める姿勢と際立つた対照をなしているのが特徴的である。要するに民主的国家であるアメリカは、この地域の民衆にとって敵性国家の支援国であり、それが友好関係を結んでいるのは、専らこの地域でも決して民主的とはいえない国々なのである。外交政策の観点からすればこの民主主義国は、この地の多くの民衆には少しも民主的なものと映じてはいないのである。

度重なるイスラエルとの戦いの結果明らかにされたのは、この新造国家の拡張主義であり、それを封じ込めるために周辺諸国は夥しい軍事費、労力を費やさねばならなかつた。しかしエジプトの脱落が示すように共同の防衛体制は年を追う毎に弱体化し、このような事態はそのままパレスティナ情勢の悪化に連動している。このような推移を長らく見守ってきたこの地域の民衆は、自らの土地を追わ

SAMPLE
Shoshi-Shinsu.com

序

イラクの現状は、まさに彼らが危惧するイスラーム世界のパレスティナ化の実例そのものと映ずるのである。したがつてこの地の民衆は民主主義体制といった、上辺だけの、抽象的なスローガンに簡単に騙される事はない。彼らはその苦い歴史的体験を通じて、自らの主権、自立性を擁護し、守り抜くことなしにこの体制の確立は不可能であり、この手順の先後は決してありえないことを熟知しているのである。民主主義体制が先か、またはその前提条件となる主権の確立が先かという主題は、この世界の現代史の中に明白な痕跡を残している。例えば過激派と呼ばれる国々は、そのほとんどが社会主義体制を採っているが、その内実を検討すれば厳密に経済体制の変革を基本に据える西欧、ソ連型の社会主义ではない。冷戦構造の中でイスラエルに加担するアメリカからの政治的圧力を避け、それに抵抗するために他方の極であるソ連の側に傾いたという、状況依存の傾向が濃厚なのである。これらの国々に顕著な特徴は、優先課題が特定の主義主張ではなく、政治的自主性の確立、維持にあつた点である。

イラク戦後の混乱の構造を理解すると同時に、イスラーム世界の近未来を推測するためには、この地域の百年の歴史を概観し、それを貫く基本的なテーマである主権、自主性の確立、維持の試みという問題に焦点を当てるにしく述べるまい。このような観点からみれば、今回の戦いにおける大義の欠

如は由々しき欠陥であり、それは今後的情勢に甚大なる影響を及ぼさずにはいない。それは現地の民衆に、次のような猜疑心を駆り立てずにはいないものなのである。テロ活動の抑止という口実で行なわれたアフガニスタン、イラクに対する攻撃は、これによつてこの地域一帯に地政学的な優位を確立するための手段であり、その何よりの証拠はアメリカ側が、密かに次の標的としてシリア、イランに狙いを定めている事実が挙げられよう。このようにして拡大される地政学的優位は、具体的にはイスラエルの東側の脅威、障害を除去し、結果的にはその国の地位を著しく上昇させることにつながるのである。この種の憶測を裏打ちするように、重荷を取り除いたイスラエルは、その余裕からかイラク戦開始後から、急激にパレスティナ攻撃をエスカレートさせ、被害の度合いを増大させている。イスラエルの拡張主義に対する抑止力は、今回のイラクの崩壊によつて甚だしいマイナスを蒙つているのである。

このような情勢を機にして声高に呼ばれ始めたのは、アメリカ主導の「大中東イニシアティブ」という構想である。これは民主化、経済開発、女性のエンパワーメントという三つの柱を基軸に、外側からのイニシアティブによってこの世界の変革に着手しようという壮大な計画であるが、この構想の内容はそれぞれ尤もなものであるにしても、問題はその実施法にあるであろう。この計画に対してはほとんどの中東諸国が拒否の態度を示しているが、このような反発も彼らにとつてはきわめて当然であろう。例えば民主化という問題一つを取り上げてみても、その実現がイラク方式でなされる場合、

序

既存の政権はすべて力ずくで交代を余儀なくされることになり兼ねない。これは民主化の名を借りた再植民地化につながるものであるが、覇権国の側は現地の文化的特性、固有の伝統等にはお構いなしに、このような自己流の体制の変化を試みているのである。このような変革が、部分的にはイスラエルを利することになり、大局的には中東全域を大国の意のままにし、その自主性を損なう結果をもたらすことは明らかなのである。

イラク戦争におけるアメリカ主導の連合軍の圧倒的勝利は、イスラーム世界を震撼させずにはいかなかった。この敗北は、この地域の人々に深刻な挫折感を与えると同時に、さまざまな教訓を与えていく。この世界の現代史は、外部勢力の分断統治の戦術に簡単に取り込まれる、この地域の政治的弱体化を露呈させているが、新たな負の体験を迎えつつある民衆はより深い警戒の念を持って、情勢に対処していくことであろう。今のところ彼らは国家レヴェルでの正常戦を戦う力には欠けているが、共通の歴史的な負の体験を梃子にして、外部の圧力に対しては執拗なゲリラ的抵抗を行ない続けることであろう。力の非対称性が増大するにつれて、公正さが失われるのが世の常であるが、公正さの損傷が著しくなるにつれて増大するのも民衆の敵愾心である。問題解決の要はありうべき公正さの維持にあるが、テロの多発、テロ抑制のための過剰防衛、民衆の強い反発といった悪循環に振り回される現状にあって、われわれに求められているのは、さまざま角度から問題の根源に迫る努力であろう。

本書では、第一部において、先ず眞田芳憲がイラク戦争の法的側面の分析を行ない、次いで陶常道

が第二次大戦前から現在に至る中東情勢一般について、テロを誘発する原因に焦点を当てて論じている。またイラク戦争の遠因となる中東世界の歴史を回顧し、同時に現状をも分析する第Ⅱ部においては、先ず、櫻井秀子が、イランとアフガニスタンにおけるイスラーム政権の成立と、その役割、位置について考察している。次いで、この地域における革新運動の旗頭であつたエジプトの栄光と悲惨について、北村文夫が分析し、その後に黒田美代子が、パレスティナ問題の歴史と現状について詳細な報告を行なうと共に、本書の総括として簡単な中東諸国の現状の分析を行なつていて。本書はイラクの問題を、生起する現在の事象を追うばかりの考察ではなく、一段と高みに立つ歴史的な視点からこの問題に光を当ててみようという、地域文化学会のメンバーによる共同の試みである。

二〇〇四年十二月

編
者

SAMPLE
Shoshi-Shimizu.com